論 文 内 容 の 要 旨

放送大学大学院文化科学研究科
文化科学専攻人間科学プログラム

今西　ひとみ

１．論文題目

「米国の子ども向け地域スポーツ活動を介した日本人家庭の異文化参入」

２．論文要旨

本研究の理論課題（目的）は、米国に居住する日本人家庭における子ども向け地域スポーツ活動の参加は、言語を介さない異文化参入のインターフェイスとして有効であり、さらにその経験に基づき、その後の子どもの人生に有効に働くことを明らかにすることである。

そのため、第一章（序論）では、本研究の背景である米国における子ども向け地域スポーツ活動の存在とこれまでの日本人の米国における異文化参入、スポーツを扱う視点からの日本人の身体性と学校教育との関連、米国における保護者の教育的戦略について概説し、作業課題として以下の五つを設定した。

１．学校体育や地域スポーツ活動といった身体性を伴う活動は、米国に居住する日本人家庭にとって米国社会へアクセスしやすいインターフェイスなのか
２．米国ではどのように地域スポーツ活動が提供されているのか
３．米国滞在の日本人家庭は、どのように地域スポーツ活動に参加しているのか
４．日本人家庭で地域スポーツ活動に参加する者の効果は何か
５．米国の地域スポーツ活動に参加した日本人家庭は、どのような場面でその効果を活用し、その後の人生に有用するのか

研究方法については、１）文献調査、２)質問紙調査、３）インタビュー調査の三方法を用い、各章で必要に応じて組み合わせながら結果の報告を行った。先行研究については、作業課題にそって海外における地域スポーツ活動、異文化適応、学校外教育、身体性と学校教育、社会階層とスポーツ、の五つの研究領域を取り上げながら、本研究の位置づけや意義を解説した。

第二章では、作業課題１として「学校体育や地域スポーツ活動といった身体性を伴う活動は、米国に居住する日本人家庭にとって米国社会へアクセスしやすいインターフェイスなのか」を取り上げた。この課題のため、米国と日本の学校体育の機能について比較検討し、日本人の子どもが体験してきた日本の学校体育の経験が、米国では異文化参入に有効であることを示した。具体的に述べると、日本の学校体育で学習してきた多種多様な運動経験は、

日本人家庭の子どもが米国の身体活動を伴う生活や教育場面においては、予測のできる運動や動きである場合が多く、現地での他の子どもに比べて物理的にも心理的にも優位な立場を形成できる。また国際調査の各国間における子どもの体力データ比較からは、部分的にではあるが、日本の子どもが米国のものを上回るとする報告があり、この点を支持する。

第二に、保護者の自由記述およびインタビュー内容から、米国の学校教育で身体活動を伴う経験におけるこれらの優位な立場が、日本人家庭の子どもにとって、自尊感情の維持、日本の学校教育に対する信頼や自信につながっていることが明らかにされ、言葉や文化の障壁がある異文化の適応過程において支援となりうることが確認された。

第三章では、「米国ではどのように地域スポーツ活動が提供されているのか」の作業課題２を取り上げた。米国の青少年ユーススポーツ・プログラムの資料等に基づき、地域スポーツ活動の類型化を行ったところ、大きくは「地域」と「学校」の二つに区分され、さらに六類型に分類された。本研究対象の子ども向け地域スポーツ活動はこの中で、おおむね「地域」類型に該当した。また調査対象地であるフォート・リーは、この類型では、地域型四つをほぼ網羅している。すなわち、フォート・リーは学校教育以外のスポーツ活動の場としては、実施環境が恵まれていることが明らかにされた。加えてスポーツプログラムの豊富さやコーチ層の厚みは、地域の世帯収入の高さや公教育との関連も見られる。これらの事実より、現地での地域スポーツ活動の設備や運営の充実は、地域の経済的な豊かさとの関連が伺え、かつ子どもの地域スポーツ活動の参加も保護者の意識に依拠することから、選択による学校外活動の格差も予測された。

第四章では、「米国滞在の日本人家庭は、どのように地域スポーツ活動に参加しているのか」の作業課題３について論じた。第一に、保護者の属性については、母親の 9 割が日本人、父親は 3 割が外国人、残り 7 割は日本人で、海外赴任が約半数を占めており、父親、母親ともに高学歴の集団であることが特徴として明らかになった。また全体の約 6 割が学区の優位性を理由として居住地を選択していると回答したことから、日本人家庭が子どもの将来にかかわる有効なスキルと能力の獲得の目的で、居住地選択による教育投資的な意向を保持すること明らかにした。第二に、地域スポーツ活動への参加、非参加は子どもの個性や資質での差異ではなく、米国社会で期待される「積極性」と「個の確立」といった保護者の性格特性（「積極性がある」、「一人でも平気」）が、分岐要因となったことが明らかにされた。第三に、参加群と非参加群の保護者における子どもへの将来の希望については、参加群は、英語の活用といった希望や目的が明確に述べられており、非参加群では、現地での自己主張や意思の明確な表示の希望の他に、国際的視野の拡張、あるいは日本帰国を意識した意見が見られた。

第五章は、作業課題４の「日本人家庭で地域スポーツ活動に参加する者への効果は何か」について議論した。子どもについては、地域スポーツ活動への参加は、運動量の確保や種目技能の向上に加え、異文化適応を促進させる自信の獲得や、異文化でのソーシャルネットワーク構築への効果が見られた。また保護者や家族については、地域スポーツ活動への子どもの送迎、コーチやスタッフとの交渉、現地の保護者との交流など、子どものスポーツ環境を整えるための副次的場面で、異文化接触の増加、語学の促進、家族の娯楽や家族単位での異

文化間交流などの影響が明らかとなった。

第六章では、「米国の地域スポーツ活動に参加した日本人家庭は、どのような場面でその効果を活用し、その後の人生に活用するのか」の作業課題５に対し、保護者へのインタビュー調査を行い、その回答から以下の三つが明らかとなった。

第一に、日本の保護者は、地域スポーツ活動が身体性に依拠する活動である点から、学校体育と同様に自分の子どもにとって参加が有効であること意識し、放課後に学校外活動として参加させている。第二に、保護者には地域社会に参加するストレスが見られるものの、保護者の支援や連携が、地域スポーツを通じた子どもの参加と適応を促進させ、その後の人生に有利に働く子どものスキルと能力に影響を及ぼすことが明らかにされた。但し、保護者の地域への関わり方が、子どもの異文化接触の機会に関係することから、家族連携や地域でのソーシャルネットワークの構築が可能な家庭の日本の子どもは、結果的に現地で獲得できるスキルと能力の内容が拡充することが明らかとなった。第三に、地域スポーツ活動への参加は、異文化接触による初期段階でのきっかけや足掛かりとなり、かつスポーツ活動を通じての駆け引きによる子どもらの精神的な強化につながることが挙げられた。また地域スポーツ活動への参加も含めた場面から得られるものとして、早い段階で結果のわかるスキルや能力〔編入や入試につながる語学の獲得〕と、将来的に有用と判断できるスキルや能力につながるもの〔現地で渡り合える語学力、異文化交流の継続、自文化への誇りなど〕が挙げられた。地域スポーツ活動は現地で参戦できる語学に関わる能力について、支援的影響を及ぼすことが明らかにされた。また各自の獲得されたスキルと能力に基づき、将来に生かす計画がなされていた。

第七章（結論）では、これまの章のまとめとして以下の三つの結論に至った。

第一に、日本人家庭の子どもは、日本の学校体育で学習してきた多種多様な運動経験によって米国の身体活動を伴う生活や教育場面において物理的にも心理的にも優位な立場を形成できており、このことにより放課後の地域スポーツ活動に参加する際は、先の学校教育場面で確認された優位性と自信を維持しながら、さらに身体活動を中心とする体験を蓄積してゆく。日本の子どもにとってこうした一連の異文化の体験プロセスは、より一層自尊感情の維持、異文化環境でのソーシャルネットワークの構築や日本の学校教育に対する信頼と自信を意識することにつながり、結果的に言葉や文化の障壁を伴う適応の支援となっている。つまり日本人家庭の子どもの異文化適応のプロセスにおいて、米国の学校体育や地域スポーツ活動などの身体性を介した活動は、米国社会へのアクセスしやすいインターフェイスとなっている。

第二に、地域スポーツ参加については、米国の保護者による経済格差の理由とは異なり、本研究対象の日本人家庭は、第一段階で保護者の性格特性が要因となり、第二段階で保護者の関与が子どもの異文化接触の機会に影響を及ぼした。このことから、日本人の場合、学校外活動である地域スポーツへの参加は、一貫して保護者が関与しており、関与の度合いが、子どもの異文化接触の機会に影響を及ぼし、結果的に現地で得られるスキルや能力に反映する。

第三に、日本人家庭にとっては、地域スポーツ参加が異文化接触初期の段階でのきっかけ

や足掛かりとなる役割を果たし、精神面への強化につながったと考えられ、また地域スポーツ活動の参加を含めた現地での様々な活動を通しての観点からは、現地で獲得されるスキルと能力について、早期に支援的な効果が明らかになると予測されるものと、将来的に効果が予測でき、その後の人生に有用と思われるアウトカムとしてのスキルや能力が確認された。また後者の現地での同等な関わりに参戦するための「語学の獲得」については、地域スポーツ活動への参加が、支援的な影響を及ぼす。

以上の議論により、米国に居住する日本人家庭における子ども向け地域スポーツ活動の参加は、言語を介さない異文化参入のインターフェイスとして有効であり、さらにその経験に基づき、その後の子どもの人生に有効に働くとの問いを明らかにした。

Abstract

The School of Graduate Studies,
The Open University of Japan

Hitomi IMANISHI

1. Thesis Topic

"Cross-Cultural Participation of Japanese Families through American Youth Community Sports"

2. Abstract

The objective of this research is to demonstrate the effectiveness of American community youth sports for Japanese families living in the United States as an interface for cross-cultural participation that does not rely on language; and furthermore, to explain how children can effectively utilize this experience as a foundation later in life.

To this end, the preface shall outline Japanese families' cross-cultural participation in America and information on American youth community sports, the context of this research; the relationship between the Japanese physical condition and formal education from an athletic perspective; and the educational strategies of parents in America. It also poses the following five questions:

1. Are physical activities such as physical education in schools and community sports an accessible interface to American society for Japanese families living in the United States?
2. What types of community sports are offered in the United States?
3. In what types of community sports do Japanese families living in the United States participate?
4. What are the effects of Japanese families' participation in community sports?
5. In which areas do Japanese families who have participated in American community sports experience those effects, and do they utilize them later in life?

Research methods included 1. a literature review, 2. questionnaire-based surveys, and 3. interviews, from which information was compiled as needed and results reported. In previous research, by examining the five research fields of "overseas community sports," "cross-cultural adaptation," "education outside of school," "physical condition & formal education," and "social class & sports" in response to the questions posed, I expounded upon the foundation and importance of this research.

The second section addresses the first question: "Are physical activities such as physical education in schools and community sports an accessible interface to American society for Japanese families living in the United States?" To address this, I conducted a comparative study of the functions of American and Japanese schools' physical education and demonstrated that Japanese children's experience in Japanese physical education proved beneficial in cross-cultural participation in America.

Specifically, Japanese children are able to use their experience from practicing a wide variety of physical activities in Japanese physical education classes toward participation in American physical activities in both daily life and in school; as there are many forms of predictable exercise and movement, they are thus positioned to outperform local students both physically and psychologically. Furthermore, although this information is not complete, from a cross-country comparison of data regarding physical stamina, there are reports that Japanese students surpass American students; these reports therefore support this point. Second, parents' unprompted accounts as well as interviews reinforce the fact that Japanese children's excellence in physical activities in American schools serves as a boost to the children's self-esteem and is also linked to trust and confidence in the Japanese educational system. Although cross-cultural adaptation poses hurdles such as language and culture, this serves to verify that children's abilities can support them in the adaptation process.

The third section addresses the second question: "What types of community sports are offered in the United States?" Based on data from American youth sports programs, in the classification of the types of community sports programs, they were principally divided into the two categories of "community" and "school," then further divided into six groupings. The subject of this research, children's community sports programs, falls under the "community" classification. Likewise, the area surveyed, Fort Lee, roughly covers the four subtypes of community classification. Essentially, Fort Lee is shown to be a solid environment for sports activities outside of school. Furthermore, it is evident that the richness of the sports programs and abundance of experienced coaches are related to such factors as the area's household income and public education. These facts establish the link between the quality of local sports facilities and management and the degree of the region's economic affluence. Furthermore, as children's participation in community sports is dependent on their parents' involvement, it was predicted that there would be environmental disparities in out-of-school activity environments depending on the choices made.

The fourth section addresses the third question: "In what types of sports do Japanese living in the United States participate?" First, regarding the demographics of the parents, 90% of mothers were Japanese; 30% of fathers were non-Japanese, and the remaining 70% were Japanese. About half were in the United States as a result of job transfers and, overall, both fathers and mothers had pursued higher education. Furthermore, as approximately 60% of respondents stated that their choice of housing location was influenced by the quality of the local school district, it is evident that there was a desire of Japanese families to live in a location that would have a positive impact on their child's education, so that their child would develop the skills and abilities necessary for their future. Second, participation or non-participation in community sports was not a matter of the child's personality or disposition, but was listed by parents as a result of American society's emphasis on "assertiveness" and "individualism" ("S/he is assertive," "They're fine on their own"). Third, regarding hopes for their child's future, parents of participating children expressed a desire for their child to use English, whereas parents of non-participating children listed a desire for their child to demonstrate self-

assertion and individual intention, a broadened global perspective, or their eventual return to Japan as reasons.

The fifth section addresses the fourth question: "What are the effects of Japanese families' participation in community sports?" For children, participation in community sports not only promoted physical activity and improved abilities, but also contributed to self-esteem, which is beneficial to integration in a foreign culture, as well as the building of social networks within that culture. Furthermore, for parents and families, the secondary activities involved in supporting children's participation in sports, such as taking them to activities, interacting with coaches and staff, and mingling with other parents, led to increased cross-cultural connections, linguistic development, familial enjoyment, and cultural exchange at the family level.

The sixth section, in addressing the fifth question, "In which areas do Japanese families who have participated in American community sports experience those effects, and do they utilize them later in life?," analyzed the responses from the parent interviews and established the following three points.

First, Japanese parents, due to the reliance of community sports on children's physical condition, were aware of the equal importance of in-school physical education and participation in community sports, and therefore involved their children in after-school activities. Second, although parents experienced stress as a result of their involvement in the local community, their support and cooperation promoted their children's participation and adaptation, as well as improved their children's skills and abilities that would be beneficial in later life. However, as the relationship parents have with the area has an impact on their children's opportunities to connect with the local culture, Japanese children from households able to build connections with other families and form local social networks are better equipped to effectively obtain skills and develop a wider range of abilities. Third, participation in community sports may serve as a starting point or stepping stone in the initial stage of cross-cultural contact; the strategizing involved in sports is also connected with improvements in children's emotional strength. In addition, it can be observed that the effects of participation in sports on skills and abilities visible at an early stage (linguistic acquisition that impacts admission and entrance examination results), as well as skills and abilities deemed useful later in life (language ability sufficient for local communication), development of intercultural relationships, and pride in one's own culture are apparent. In particular, community sports have a positive impact on language ability, enabling children to communicate naturally in the local community. It was also expected that each individual would be able build on their acquired skills and abilities going forward.

As a result, the following three principal conclusions were derived. First, in the local American setting, with regard to their physical activities within school, the relative superiority of Japanese children was identified. Furthermore, even in the domain of community sports, this contributed to self-esteem development and the establishment of social networks. This suggests that physical activities in the United States serve as a space in which Japanese children can excel, positively contributing to their cultural adaptation.

Second, with regard to participation in community sports, unlike the reasons cited by local American parents related to economic disparity, among the Japanese families who were the subject of this research, the parents' personalities were the primary factor, with the secondary factor being the parents' concern for their children's opportunities for cross-cultural interaction. This study therefore demonstrated that for the Japanese, participation in out-of-school community sports unfailingly involved parental participation; the degree of parental involvement affects the children's opportunities for cross-cultural interaction; and as a result, it will reflect the skills and abilities acquired in the local community.

Third, for Japanese families, participation in community sports served as a starting point or stepping stone in the initial stage of cross-cultural contact, and is believed to be connected to improved emotional strength. Additionally, by means of participation in different local activities, including sports, locally acquired skills and abilities are expected to have a positive effect in the early stages; these were also predicted to have latent effects, with benefits later in life. In particular, participation in community sports has a positive effect on the "language acquisition" necessary for asserting oneself with confidence and communicating with peers in the local community.

博士論文審査及び試験の結果の要旨

学位申請者
　放送大学大学院文化科学研究科
　文化科学専攻人間科学プログラム
　氏名　今西　ひとみ

論文題目
　米国の子ども向け地域スポーツ活動を介した日本人家庭の異文化参入

審査委員氏名

・主査（放送大学教授　博士（学術））　岩崎　久美子

・副査（放送大学特任教授　教育学博士）　小川　正人

・副査（放送大学教授　博士（学術））　関根　紀子

・副査（上智大学教授　博士（教育学））　丸山　英樹

論文審査及び試験の結果

（１）本論文の学術的、社会的意義
　本論文は、日本人を対象とした異文化適応に関する研究で従来着目されてこなかった身体性に焦点をあて、地域に根差したスポーツ活動への参加が日本人家庭に及ぼす影響を解明することで異文化間教育や青少年教育に関する研究に新たな知見を提示するものである。
　本研究の背景には、米国と日本における子どもへのスポーツ活動の提供に関する文化的差異がある。米国では、スポーツが子どもの目標達成意欲につながり成長に有意義とする研究結果が提示されたことから、教育熱心な保護者層は、子どもを居住地域のスポーツ活動に参加させる傾向がある。しかし、居住地域でのスポーツ活動環境は、地域住民の属性や地域の社会経済的状況に影響を受け、また、その参加は保護者の意志や選択に委ねられる。一方、日本では、子どものスポーツ活動は、教科である体育や課外活動である部活動として校庭や体育館などの学校施設で行われ、日本のどの地域にあっても一定水準の内容と運動量を保証するものとして提供される。本論文は、このような両国の文化的差異に基づき、英語が熟達しない日本人の子どもにあっても、日本の学校教育を通じ身体性

を伴う活動経験を有することで米国においてスポーツ活動に参加する際の心理的障壁が少ないこと、また、言語を介さないスポーツ活動への参加が異文化適応を円滑にする傾向があることを提示する。

異文化環境における身体活動の意義に関しては、北欧においてスポーツ活動やレクリエーション活動を通じた移民統合や包摂を図る積極的施策やその実践を論じた研究などが散見される。そこでは身体性を伴う活動が言語を介さずに自己表現を可能にし、地域社会へ関わる貴重な契機となることが明らかにされている。本論文は、このような先行研究での示唆を敷衍し、新たに米国に暮らす日本人家庭の子どもを対象に身体的活動と異文化適応との関連を検討するものであり、その研究内容や知見は、独創性に富み、学術的、社会的に意義が高いものとなっている。

（2）本論文の構成と内容

本論文では、所期の研究目的を達成するために、「日本人保護者が『米国の子ども向け地域スポーツ活動』に参加させることは、現地における米国社会への容易なインターフェイスである」との理論課題を中核に据え、このことを支持するために、五つの作業課題（米国社会へのインターフェイスとしての身体性を伴う活動の機能、米国の地域スポーツ活動の提供実態、地域スポーツ活動への参加状況、参加者の効果、参加者の効果活用）を設定する。これらの五つの作業課題は、本論文の第２章から第５章で取り上げられるが、それらを整理した上で、論文全体は以下のように構成される。

第１章は、本論文の序論として、研究の目的、研究方法、先行研究、調査対象地域、用語の定義、本論文の構成などから成る。特に、調査対象地としての米国ニュージャージー州バーゲン郡フォートリー（Fort Lee）が、ニューヨーク近郊に進出する日系企業の駐在員家庭にとって、現地校の質の高さや日本人補習校があることから居住地として好まれる地区であること、また、その裏付けとして、地域の教育費の比較から調査対象地の教育環境が米国内で相対的に恵まれていることを明示する。第２章から第５章は作業課題をそれぞれ扱うが、まず**第２章**では、身体性を伴う活動が米国社会へのインターフェイスになるとの議論を行うため、公的資料である米国の体育ナショナル・スタンダード調査報告書と日本の「学習指導要領」に基づきカリキュラムの比較が試みられる。その結果、米国の体育の授業は身体に関わる知識を網羅的に教授するための座学が多く運動実技の時間が限定的であること、それに対し、日本の体育の授業は校庭や体育館で実施され、身体的な活動量・運動量が多く、実技内容も多岐にわたることが確認された。その上で、米国の学校教育における運動量不足を補填するため、日本人保護者の一部は地域スポーツ活動を積極的に利用している実態を提示する。平均的な日本の子どもにとっては、スポーツ活動は、米国での生活にあっても言語障壁を意識せずに、集団の中で心理的に優位な立場を形成できる場であり、身体性を伴う活動が異文化適応を円滑に進めるとの知見を提示する。**第３章**では、青

少年ユース・スポーツ関連資料や地方自治体のレクリエーション活動に関わる資料に基づき類型化を行い、その枠組みに沿って、調査対象地であるフォートリーでのスポーツ活動・レクリエーション活動の提供実態を明らかにする。調査対象地のフォートリーを含むバーゲン郡は、世帯収入の高さ、白人系と教育熱心といわれるアジア系が多く住む地域であり、教育的に恵まれた環境にある。米国では教育熱心な層がスポーツ活動を行う傾向があるとされるが、この地区の公教育の充実とスポーツ活動の関連について資料に基づき分析することで、地域間格差が大きい米国での調査対象地の特徴を論じている。**第４章**では、米国滞在の日本人家庭の地域スポーツ活動への参加について、質問紙調査により取得したデータから、子どもを地域スポーツ活動に参加させた群（参加群）と参加させなかった群（非参加群）の二群に分けて分析を行い、その結果、子どもの地域スポーツ活動を左右する最初の要因が保護者の「積極性」と「一人でも平気」といった性格特性であることを特定した。非参加群では、保護者の「英語の不自由さ」への回答が多いことから、地域スポーツ活動への参加には、英語の苦手意識を凌駕する保護者の積極的性格特性が重要であるとの知見が提出された。**第５章**では、日本人家庭で地域スポーツ活動に参加する者の効果について取り上げている。参加群を対象に、地域スポーツ活動の参加が直に効果があったとする「直接効果感」（「アウトプット」）と、参加後、時間を得て波及的効果（「アウトカム」）と考えられる「間接効果感」の二つの点からの回答傾向を検討した結果、直接効果感としては「運動量と運動の継続」とする回答率が高く、地域スポーツが座学中心である米国の学校体育を補填する役割を担っていることを再度確認している。その上で、地域スポーツ活動への参加により、外国人の知り合いができ、人間関係が家族にも広がることが、結果的に、「地域への定着」や「語学の促進」など異文化の仲間づくりや自信の維持に寄与し、適応が促進されると同時に現地で得られるスキルや能力の獲得が加速されることを明らかにしている。**第６章**では、米国の地域スポーツ活動に参加した日本人家庭の経験の活用について、３年以上継続的に地域スポーツ活動に子どもを参加させた保護者を対象に対面や電話によりインタビュー調査を行い、その結果に基づき論じる。調査結果から、子どもが学校や地域スポーツ活動などで身体性を伴う活動で優位性を持てることが自尊感情の獲得や適応を促すこと、地域スポーツ活動が子どもの人間関係の広がりに貢献すること、家族内の連携や保護者に対する地域におけるソーシャルサポートが子どもの異文化適応や現地で得られるスキルや能力に影響すること、さらに、地域スポーツ活動は問題行動の緩和や不足する英語力の獲得に効果があることを知見として提出する。以上の章で取り上げられた五つの作業課題での検証や結果を踏まえ、**第７章**では、結論と考察、今後の課題が整理されている。

（３）本論文の評価と試験の結果

本論文は、日本と米国の資料分析に加え、米国で独自に実施した質問紙調査と

インタビュー調査により取得したデータの分析により、異文化環境におかれた子どもに対し身体性を伴う活動が有する潜在的可能性を多角的に論じることに成功している。言葉や文化への障壁がある異文化環境において、日本人家庭の子どもが日本の学校教育で学習された多種多様な運動経験によって運動技能的にも心理的にも優位な立場を形成し自尊感情を持てることや、スポーツ活動が米国社会の中でもアクセスしやすいインターフェイスであり子どもの現地適応を加速させるとの知見は、異文化適応において身体性を伴う活動の有効性を主張するものであり、独創的研究としての価値が高い。加えて、保護者の性格特性、あるいは保護者の子どもの活動への関与や地域でのソーシャルサポートの有無などの家庭の状況によって子どもの現地で得られるスキルや能力の獲得が影響を受けるとの結果や、保護者が異文化適応にスポーツ活動が有益と意識し意図的に活用を行えば子どもの将来を見据えた教育的戦略となるとの示唆は、従来、経験知として語られてきた異文化経験のその後の効果や影響に関する論点を整理し裏付けたものとして大いに評価できる。

口頭試問では、予備論文審査会などで指摘された問題点や課題にも適切に対応したことを確認し、また、本論文の基礎となった原著論文での原語文献の的確な引用により、語学等の能力も優れていると評価した。

以上の結果、今西ひとみ氏への本学大学院博士学位の授与を審査委員全員一致で決するものである。